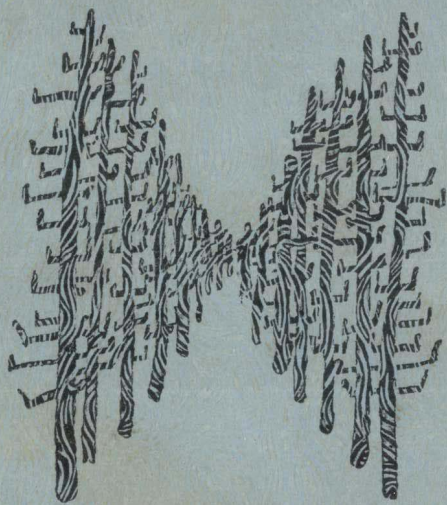


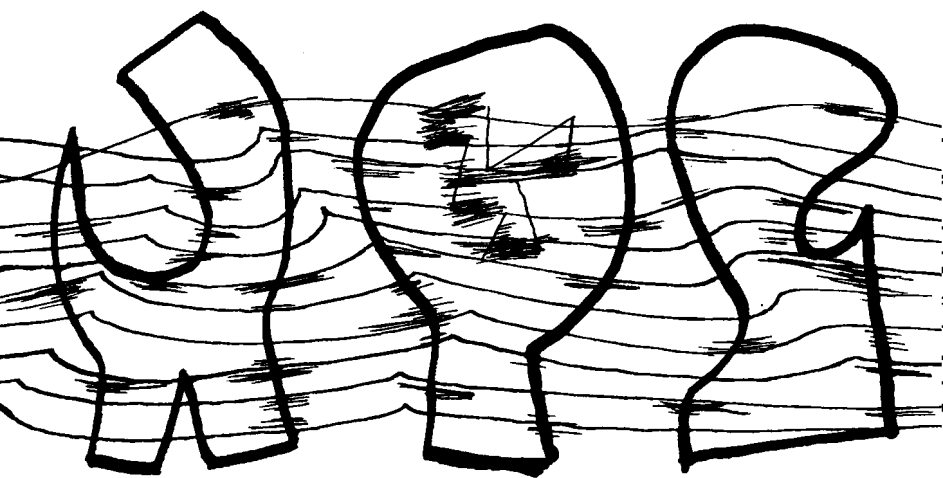
ながい鉛の道

林青梧



林 青梧

ながい鉛の道



文藝春秋

著者略歴

林青梧——本名亀谷梧郎。昭和四年朝鮮生まれ。昭和二十一年帰国。のち、東京都立大学英文科卒。丹羽文雄門下。主な著書、『飢餓革命』『南北朝の疑惑』ほか。日本文芸家協会会員。

現住所 東京都練馬区南大泉町九〇三番地。

ながい鉛の道
昭和四十七年四月二十五日第一刷

著者 林青梧 はやし せいご 定価七〇〇円

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地

電話東京(二六五)二二一一

郵便番号一〇二

印刷所 精興社

製本所 加藤製本

* 万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

ながい鉛の道

装帧
坂井真理子

目次

崩壊	五
受難のはじまり	四〇
ある解放軍司令の話	七二
クリスマス・キャロル	一〇〇
許嫁者	一二二
買えなかった登録番号	一四三
クリームの匂い	一六六
さらばダカンスキー	一八五
友情	二二〇
神の手	二四五
あとがき	二八四

崩 壊

昭和二十年八月二十六日。

日本の敗戦から、十日たっていた。

ポツダム宣言は、日本の敗退によって解放される朝鮮に、独立国家への道を約束していたが、まだ、交戦状態が終ったというだけで、朝鮮各地に日本軍は駐留し、朝鮮総督府の統治はつづいていた。

北朝鮮平壤府の街は、ソ連軍の侵入に追われて満州から逃げこんだ関東軍の家族や、満鉄関係の日本人で、ごった返していた。

停戦後、いち早く、それまで海外に亡命していた朝鮮独立運動の活動家達が、南の京城に、次次舞い戻っているらしく、二日前、この平壤でも、『朝鮮建国準備委員会』の名で、

「朝鮮在住日本人の平静と、建国への協力を期待する。諸君の三十年間の圧制は、新生朝鮮の建国に心から協力することによって償われるであろう。その場合、わが方に協力的な日本人の生命財産は保障する。特に自重を要望する」

街々にビラがはられ、建国準備委員会の腕章をまいた朝鮮青年達が、中学や専門学校にあった軍事教練用の旧式の火器を持ち出して、形ばかりの治安維持に当りはじめ、まだ武装を解いていない日本軍の兵士達に、蹴散らされたり、いざこざを起こしたりしていた。

が、そんな中で、建国準備委員会は、つぎつぎ、重要機関の接收交代に当りはじめた。

平安南道庁では、建国委員会の承認がなくては新しい証明書や一般の書類の受付発行はなされなくなり、工事は停止し、府営市場は閉ざされた。

学校も閉鎖され、一般会社や商店の営業も停止された。そして銀行が休業し、最後に鉄道が止まった。

いよいよ日本の統治は崩壊し、新国家誕生の空気が生まれはじめた。

平壤中学の第四学年に在学中だったわたしは、一片の在学証明書を渡されただけで、中学は解散となり、毎日出かけて行く先がなくなった。職場を失った大人達も、自宅にひきこもり、身辺の整理に当りはじめた。

いちおう、新国家は日本人の生命財産を保障するといっているし、これまで、主な機関はすべて日本人の手の中にあったのだから、新旧の交代は、当然、朝鮮総督府の指示によって、平安南

道庁が仲介して行なわれるものと、日本人達は考えていた。

が、一方、日本居留民の中には、悲観的な観測も流れはじめた。

「停戦とはいっても、つまりは無条件降伏なのだから、日本人はどんな目にあわされるかわからない」

そんな噂に不安をおぼえ、大同江を川舟で下って朝鮮の西海岸に出て、そのまま南下しようとする者も現われはじめた。

わたしの家では、父は、会社を朝鮮人の筆頭社員の管理にゆだね、自宅から電話で指示を与え、という形にして、日本人社員が後退する準備にかかっていた。

午後七時。日は落ちても、昼間の暑さはなかなかおさまらなかった。

夕食のあと、みんな父の書斎に集まっていた。突然、机の上の電話が鳴った。

（いまごろ、何の電話か）

「もしもし、そう。堀河です。ちょっと電話が遠いですね。え？ 坂口君。ああ、きみですか。ほう。どこにいます？ 平壤駅？ 何？ 朝子もいる？」

父は送話器を片手でおさえ、わたし達の方へふり返った。

「朝子がいま、平壤駅に来ているのだそうだ。迎えに来てくれて」

父の目に安堵と喜びが浮かんでいた。

わたし達の一番上の姉の朝子だけが、結婚して、新義州にいた。長兄の了さとるは満鉄にいるし、次兄の志郎は、九州の大学の医学部に在学中だった。この二人は、父の手のとどこところになか

った。父には、朝子の消息だけが気がかりだったのだ。

「よし、分った。必ず行きます。九時までだね」

毎日ひんばんにかかっていた電話が、ばったりかからなくなって三日たっていた。そのためか、黄昏時のこの電話は、異様な緊張をわが家にもたらしした。電話のまわりに、母と下の姉の梅子と、わたしと、弟の三七男がにじり寄った。

「あんな、坂口君の部隊が、原隊の群山に南下するのだそうさ。そこで、おそらく米軍の武装解除を受けるらしい。将校は戦争犯罪人というものに指名されるかも知れないし、そうになると、朝子の身の上が心配だから、あずかってほしいと、清一君がいうのだ」

「そりゃあなた、是非そうしなくちゃ」

母が、父に迫るように身をのり出した。

「うむ、車だ。車がいるな。金を呼ぼう」

金は会社の運転手だった。それから父は、電話番号帳を探して、電話のダイヤルを回した。

「あら、それは崔さんの電話ではありませんか」

「うむ。いま、運転手は崔の管轄に移したのだ」

崔は会社の庶務課長だった。本来、運転手は、社長の父に直属していたが、もはや父の命令は、庶務課長の崔を通さなくては運転手に及ばなくなったのか。

「あ、もしもし崔君。わたしだ。堀河だが、ちょっとたのみがあるのだ。至急、車を回して貰えないか。のっぴきならぬ用件なのだ」

それから父は、ふたことみこと、電話でやりとりしていたが、不意に、父の声が激しくなった。「いろいろあるだろうが、わたしが必要なんだ。そういっても駄目なのか？　どうなんだ。わたしは、まだ、会社の後継者をきめてはいないんだよ。どうなんだ。運転手はよこせないのかね。え？　すぐよこしたまえ」

がちやりと電話を切った父の顔色は、怒りに蒼ざめていた。

「崔のやつ、もう会社を貰ったつもりでいやがる。浅はかな奴だ。体制の交代を、早い者勝ちみたいに考えやがって」

「でも、車はくるのかしら」

梅子が心配顔になるのに、

「いや、それはだいじょうぶだ。唖鳴りつけてやったら、さすがに恐縮しおって、へい、承知いたしましたというおった」

三十分の後、門の前で、つぶれたような音のクラクションが鳴った。

「きた。きたようだ」

わたしはほっとなった。父も目に安堵を浮かべて頷いた。

梅子も、腕時計をみて頷いた。

「一時間あるから充分ね」

「でも、こんな時だから、いつ、どんなことがおこるか分かりません。早く行って、早く帰って来て下さいね」

母の心配顔に、父はうむと頷き、

「じゃ、梧郎、おまえついてこい。三七男は、家をちゃんとみているのだぞ」

三つ違いの弟は、まだ中学一年だった。生来体格が虚弱で、末っ子のせいもあり、半分母の愛玩物であったが、そんな三七男でも、男であってみれば、こんな時、たのみとなるのであった。

外へ出ると、昼間の暑気がいくらかおさまって、涼風が流れていた。木炭自動車が、煙突から白い煙を吐きながら、わたし達を待っていた。

「ああ、金か。夜分、ご苦労だな」

父が声をかけても、運転手の金は、ふくれた顔で、前方を正視し、父やわたしの方へふりむくうともしなかった。

「突然呼び出して悪かったな。ま、煙草でも買え」

父が運転席に、ばら銭を握った拳を突っこんだ。

「そうですか。どうも」

ようやく、金が、横顔の表情を動かした。

エンジンをふかして走り始めると、金は、心付けをわたされたためか、急に能弁になった。

「社長。この夜分にご苦労さんですね。日本の方も、これから大変でしょう」

「うむ、そうだな。ま、しかし、これも時世というものだ。お前達も、これからたいへんだぞ。うちの会社も、わしのあとを誰かがひきついで、新生朝鮮の産業界で重要な役割を果たしてくれることを願っているが、そうなるまでには、まだまだ、いろいろな手続きをふまなくちゃならんのだ」

だ。いずれ、朝鮮側にも監督官庁が出来るだろうが、日本側の道庁の仲立ちで、われわれは、その監督官庁と移譲の条件などを話し合うことになるだろう。だから、お前達が、勝手な思惑で、先走ったことをしても何にもならんのだ」

「そうですかね」

金がまたもや不機嫌な顔になった。父の言葉が理解出来ないのか、それとも、父の言葉に反撥をおぼえるのか。

やがて十七、八分も走って、車は、平壤駅に着いた。車からおりて、父が、

「じゃ、しばらくここに待っていてくれ」

「はい。しかし社長。なるだけ早くして下さいよ。わし等の立場もあるのです」

金が父に、対等の語調でいった。

「うむ、分った。分ったから、ここで待っていてくれ」

父が、駅の入口の、街燈の黄色い光の中で苦笑した。そんな父の方へはふりむきもしないで、金は、じっと運転席に坐りこんだまま、前方をみつめているだけだった。

わたしは父に従って駅の構内に入った。

駅はいったいに薄暗く、電燈も、要所々にしかついていなかった。待合室に人影は一人も見えず、ホームはがらんどで、しんと静まり返り、引込線に、何輛もの貨車が、つながったまま止まっていた。

事務室と、駅長室にだけ黄色い電燈がとまり、二、三人の駅員と、武装した日本兵が、部屋の

中を動きまわり、一人の将校が、兵隊達の輪の中で、帽子に金筋の一本入った助役と、何かやりとりをしていた。助役の顔色が、電燈の光の中で、やけに白っぽくみえた。

三番線に長い列車が止まり、その先頭についている機関車が、しきりに白い煙を吐いていた。客車の、びったり閉められた窓ガラス越しに、女の人や子供達の動く顔がみえた。

「あ、あれだ。お父さん」

わたしはその列車を指さすと、父もひきしまった顔になって、

「うむ。そのようだな」

領いて、二人は改札口を通り、そちらへ早足でむかった。すると、いきなり、暗がりから、ピカッと光るものが迫って来た。

「止れ!! 誰だ」

兵隊だった。

「はい、坂口中尉の留守宅の者です。電話をもらってかけつけて来たのです」

「あ、そうでありますか。失礼いたしました。伺っております」

カチッと踵が鳴り、銃剣がおりた。

「三番線のホームで、ご夫人がお待ちであります。発車まで、三十分であります。目下給水中です。どうかお急ぎ下さい」

若い兵士らしく、声にもはりがあった。その声が、闇を少し明るくした。

「ありがとう。じゃ」

わたし達は、勝手が分つたので、一目散にブリッジを渡り、三番線におりた。

「あ、お父さんに……梧桐さん」

姉が、足許にトランクをおいたまま、かけよって来た。

「おお、朝子。無事だったのか。よかった。よかった」

父はたちまち笑顔になって、姉を手もとにひきよせ、肩を叩いた。

「あ、お父上。どうもお騒がせしまして」

いつの間にか、義兄の坂口中尉が、佩剣を鳴らしながら近づいて来て、カチンと踵を合わせ、わたし達に敬礼した。そして早口に、

「電話で申上げたように、われわれは南下いたします。しかし、お父上達もし南下をご希望でしたら、まだ時間があります。少々時間をのばさせても結構であります。いますぐご連絡下さるか……いや、梧桐さんに兵隊をつけてとって返し、お母さんやみなさんをお連れ下さってもいいのです。いかがですか？」

「うむ……つまり、朝子一人では不安だが、全員一緒ならいいのかね」

「はあ、さようであります。電話では要領を得ませんでした」

わたしの気持は、大きくそちらへ動いた。

「お父さん」

わたしが父に呼びかけると、父は逆にわたしをおさえ、それから義兄の方へ、
「ご好意は有難いが、そういうわけにはいかんのだよ。いずれ朝鮮側に譲り渡す会社だが、全然

無整理のままというわけにもいかんし、それに、応召した部下達の家族も残っている。彼等をおいて、わしらだけここから立ち去るわけにはゆかんのだよ」

「でもね。ソ連軍はひどいのよ」

姉が横から口をはさんだ。

「どうひどいの？」

「もう新義州にはソ連軍が入って来たのよ」

「われわれは、交戦しながら後退して来たのです。この列車も、後部の車輛が被弾し、何人か負傷者も出ました。おそらく、南下出来る最後の列車となるでしょう。あとは、一切、交通は途絶しますよ。駅が、だんだん、われわれの命令に従わなくなりました。われわれの南下は腕ずくなのです。ここでは駅長を監禁して、人質にしているのです。進駐軍は、北緯三十八度線で朝鮮を分割します。北はソ連。南は米軍によって、当分軍政がしかれるでしょう。これから先は止らずに、われわれは、いつきに南にかけこみます」

「しかし……きみ、まだ北鮮全土にわたって何十万という日本人がいるし、一応事態は平静なんだよ」

父の声は、しかし力がなかった。平静であることの実態が目の前にあった。わたしにも、こんな平静など、いつ消しとんでしまいか分らないような気がした。

「ま、とにかく、いちおう朝子をあずかって帰ろう。車を待たせているから。さ、荷物はこれだけかね」